

大連 日本人には懐かしい街を歩く

すが 須賀 つとむ 努

コラムニスト・アジアウオッチャー

大連と言えば、どんなイメージがあるだろうか。筆者が初めて大連に行ったのは今から32年前。日本時代の建物が建ち並び、アカシヤの並木が鮮やかな、何となく日本的な雰囲気が残る街として、強く印象に残っている。今回はそんな大連を久しぶりに旅したので紹介してみたい。

中山広場付近

大連の街の中心、中山広場に出る。この広場は全て日本時代に建てられた歴史的建造物に囲まれているが、



写真1 中山広場 旧横浜正金銀行

中でも目を惹くのは現在中国銀行が使っている建物。一番格好良いと思う。元は横浜正金銀行大連支店だ。色が明るく、頭はロシアっぽい。旧大連市役所も重厚な作りでよい。

そしてお目当ては旧大和ホテルの大連賓館。こちらは10年以上前に泊まったことがあったが、老朽化で一昨年営業を停止。警備員に聞くと『改修中だが、ホテルを再開するとは聞いていない』とのこと、もうここに泊まることは出来ないようだ。こういうホテルにはファンが多いので、観光業的には痛手だと思うが、どうだろうか。

中山広場から放射線状に延びる魯迅路という道の名前に惹かれて歩き始める。ちょっと雰囲気のある建物は、旧満鉄図書館。この図書館でちょっと話を

聞いたのだが、対応が実に親切で、中国的ではなく？びっくりした。この付近には満鉄関連の社宅があり、すぐ近くに本社ビルも残されており、その横には満鉄陳列館があった。陳列館に入ろうかと思ったが、閉まっていたので、外から見て退散する。満鉄ファン、鉄道ファンがやって来るのだろうか。

大連を歩いていると、以前と比べてとにかく満鉄関連の施設を目にすることが増えた。これは昔を懐かしむ日本人観光客を当て込んでいるのだろうか。中国人自体は満鉄にどこまで関心を持っているのか不明だが、1990年代から日本企業を大量に誘致した実績のある大連は、新たな誘致を行っているように見えた。

ロシア街、南山路

大連駅の前を通ると、天津などへ出航する船のチケットを売っている。どうせなら天津から船で来ればよかった、などととんでもないことを思ってしまう。煙台という地名もあった。32年前大連から船に乗って煙台に午前3時に着いてしまい、駅で野宿？した記憶がある。何とも懐かしい。

駅の北側、ロシア街へ向かう。線路を跨ぐ橋がある。旧日本橋、現在の勝利橋だ。そこを越えると、ロシアが100年以上前に建てた船



写真2 ロシア街



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



会社の建物がきれいに残っていた。今は美術館らしい。それをシンボルとして、ロシア風情街がスタートする。日露戦争以前、ロシアがここに来て東清鉄道を敷設している。大連の由来はダーリニー（遠い）というロシア語らしい。ロシア正教会のような建物も見える。

更に歩いて行くと趣がガラッと変わる。現在の上海路付近、こちらは日露戦争後の日本人街だった場所。当時のロシアと日本の国力の差はどうだったのだろうか。上海の日本租界でも思ったのだが、石造りの建物は100年を越えても立派に残り、木造の家があったとしても、100年はもたないようだ。

南に下り、南山路辺りを歩いてみる。昔の建物が残っており、かなり整備されて観光客が歩いている。ここは32年前に泊まったところだが、その南山賓館は見付からない。日本時代大連で名を成した台湾人医師、孟天成の旧居などがそのまま残されている。この時代、特に日本に留学した台湾人は、台湾に帰っても日本人と同等の待遇が得られなかったもので、満州に渡る者が多かったらしい。彼らが満州でどのように生きたのかについては実に興味深い、その真相はあまり明らかではない。

甘井子と満鉄社宅

甘井子は大連駅前からバスで30分以上かかる遠い所だったが、ここにも日本人街があった。街中にも一部戸建ての家が少し残っていたが、今は数世帯が同居しているように見え、庭には野菜などを植えている。更に街から緩い上り坂を20分以上歩いて行くと、日本時代の建物がきれいに残っている地域がある。なぜ甘井子の街からも離れたこんなところに家

があるのだろうか。日本人は一体ここで何をしていたのだろうか。

そのヒントは付近にあった中国石油の大工場だろう。恐らくはこのエリアに石油や石炭などエネルギー関連の施設があり、多くの日本人が働きに来ていたのではないかと想像する。このエリアは現在でも工場があるだけで開発から取り残されていて、なんだかタイムスリップしたような不思議な気分になった。

大連駅前から待望の路面電車に乗り、終点の興工街まで行く。興工街の北側にも、かつての満鉄社員の社宅があったが、その古い建物群は、一部は戸建てで立派なもの、大半は団地のようなところだった。木造の玄関扉を見ると、やはり日本時代かと思う。これらの建物は保存の対象になっている様子もなく、恐らく近々取り壊しになるのではないだろうか。正直これらの建物を全て保存するのは難しそうだ。

地下鉄で会展中心駅に行くと、そこは高層ビルがいくつか建ち、歴史とは無縁のような場所に見えた。だが道の反対側、星海街付近には上等な別荘風の家がいくつも立ち並んでいる。入って写真を撮りたいと思ったが、どうやら現在一部は軍関係の施設となっているようで断念する。ただこれを見ると、ここが日本時代の高級別荘地だと分かる。

大連の街を歩いてみると、日本時代の建物があちこちに残り、しかも現在も使われており、日本人には居心地の良い場所に思える。ただここ10年、他の中国の都市と比べると、残念ながらその発展スピードは遅く、それがこの旅情を生み出していると思うと、ちょっと複雑な気持ちにはなる。